『高碕達之助 名言に学ぶ』

令和3年 高碕達之助に学ぶ会 編集より

１．**母の愛こそ偉大な心の資源である**

高碕は子供のころ、実にやんちゃで、いたずらの限りを尽くしたが、その度に母は優しく後始末してくれた。

限りない母の愛に感謝するため、昭和二十九年三月二十三日に、母の生誕地である大阪府大東市の慈眼寺と同年九月二十三日に母の終穏の地である高槻市柱本の興楽寺に悲母観音像を建立した。

２．**淀川こそ生みの母であり育ての親である**

高碕は、十八歳で故郷・高槻の柱本を離れるまで産湯に始まり、飲み水からお風呂、洗濯に至るまで、終始一貫淀川の水に育まれた。その後高碕は故郷を訪れる度ごとに、祖先の墓にお参りする前には必ず淀川の水で漱ぐのが習慣となっていた。

３．**私の一生は水産講習所にはいって**

**水産をやることにしようということに決めてしまった**

高碕が茨木の大阪府立第四中学校で浜田真名次という先生から政治地理の授業で「日本の工業は繊維工業で中国やインドが工業化する時代が来たら、日本の繊維工業は成り立って行かない。ただ一つの日本の生きる道は水産製品を外国に出して食料を輸入する道が残されているだけだ」と聞いて感激したことが東洋製繊創業につながっていった。

４．**若い人が仕事をする時には儲かるということより、その仕事が将来大きくなるかどうかを考えて、もし将来性があるという見通しを得たならば全精根を打ち込んでやるべきだ**

高碕が水産講習所を卒業してすぐに技師長として働いた三重県鳥羽の東洋水産の専務・石原員吉の言葉である。

石原は真珠で有名な御木本幸吉の親友であったが、この言葉は若い時の高碕の心に感銘を与え、生涯高碕の事業に対する根本的な考え方につながった

５．**釣は魚を釣ることが目的ではないそれは楽しみであって、**

**魚が取れることはその楽しみの結果なんだ**

アメリカの第三十一代大統領であるハーバートフーヴァーの言葉である。

高碕がメキシコで罐詰工場の仕事をしていた時、サンタローサリアの銅山で技師として働いていたフーヴァーとよく一緒に魚釣りに出かけていた。高碕はフーヴァーから「事業は金儲けが目的ではなく、金儲けはただその結果である」ということを学んだ。

６．**何事によらず人間は、目先の慾に捉われ易いのです。**

**我等の慾望はもっと永遠の慾望をもたねばなりません**

会社の利益の分配に対する高崎の考え方である。

「利益の半分は之をさいて機械、建物の償却及び従業員の知識の向上のために費やし、株主諸君に対しては一定の配当を支払い、残余の利益を株主と従業員と得意先の三つで分配すべきものです」と続けている。

７．**はじめから軽くつきあえる者より、つきあいにくい者、あるいは意見の合わない者のほうが、理解し合ったとなると、かえって仲よくなる例がある**

高崎が二十四歳の時、漁業調査のために渡ったアメリカの無人島でコヨーテを捕まえたがなかなか人になつかなった。しかし辛抱強く飼いならしたところ、他にもたくさん動物を飼っていたが、二週間留守をすることになった時に動物たちを放してやると、コヨーテだけが戻ってきた。

コヨーテから得た人生観である。

８．**相手を決して敵視せず、友人であるという観念のもとに、**

**その目を見て話すこと**

高崎は若いころに、ロサンゼルスにあるライオン・ファームでベチエという友人から「ライオンに近づく時は、必ずその目をみる」ということを教えてもらった。

このことを時の外務大臣・松岡洋右氏に満州重工業の高崎が面会した折「ヨーロッパの大人物と会う時は必ず目を見て話をしなさい」と忠告したところ、後で感謝されることとなった。

９．**随緣且從容（えんにしたがってしばらくしょうよう**）

江戸時代の良寛和尚の言葉で「縁のままに生きていこう」という意味である。

昭和二十年八月十五日の終戦の日、 当時満州重工業総裁であった高橋は連日の過労がたたり、嗜眠性脳炎という病気にかかってずっと眠っていた。 目が覚めたのは二日経った八月十七日の夜中であったが、病室で最初に手にした本は、 相馬御風が子供向けに書いた『良寛さま』だった。

１０．**リーダーは自己犠牲を払う勇気を持っていなければならない**

在満邦人の満州引揚の時、東北(満州)日本人会会長としてあらゆる交渉を一手に引受け、自分自身の命を投出す覚悟の上、 東奔西走全員誰一人傷つけることなく帰国させた功労は大なるものがある。 全てを投出す覚悟が皆を救うことにつながった。 身をもって武士道の中心をなす自己犠牲の範を示した。

１１．**すべての事業の目的はそれに関連する多数の人々の生活を向上し、**

**幸福を増大することにある**

高崎の経営理念の中心にある考え方である。

「会社は決して、株主のものでもなく、従業員のものでもない。まして、いわんや経営者のものではない。これらの人と消費者、それに原料供給者の事業である。事業はこれらの人々を、すべて満足せしめるものでなければいけない」と続けている。

１２．**壁を飛び越える**

高崎の人生哲学であり、

「人でも事業でも壁にぶつかった場合、 とるべき方法は、大体三つある。 一つはその壁に体当たりして、壁を打ち壊す方法であり、次はその壁を遠く迂回して、避けてゆく行き方である。 最も巧妙な行き方は、全く新しい方法を考えてその壁を飛び越える事である」と述べている。

１３．**機械の活動が停止すれば墜落する飛行士の考へで、**

**経営の衝に当たらねばなりません**

昭和五年以来、恐慌に見舞われ、経営を立て直すために、当時常務であった高崎が 社員に対して発憤を促した言葉である。

「幸いにして、機体は此暗雲を乗り切るには 充分自信がある状態にあります。残された課題は 従業員諸君の一致団結と、そして株主と関係業者諸氏の御支援と御後援を得るか得られないかにあります」と続けている。

１４．**限界に挑め**

かのドイツの宰相ビスマルクが 「その国の未来を知りたければ、その国の青年を見よ!」という言葉を残したが、 現代の若者に欠くべからざる資質は 常にチャレンジ精神を持つことである。 高崎の満州時代の活躍、 戦後の経済人として政治家としての活躍は彼自身が常にチャレンジ精神を忘れず、 努力精進をし続けた結果であった。

１５．**竹刀と真剣（しないとしんけん）**

大阪で有名だった田附政次郎氏が、時の日銀総裁・井上準之助氏に向かって「あなた方は、面と胴と小手をつけて竹刀で剣術をやっているようなものだが、われわれは体を張って真剣勝負をやっているのだ」と言ったのだが、 高崎は経営者にとって必要なのは、真剣勝負の精神であると常々説いていた。

１６．**競争こそが新しい起業意欲を盛りたて、**

**新たな創意を喚起するものだ**

高碕は経営者として創意と努力を大切にし、競争を恐れていては事業はできないという信念を持っていた。

しかしその競争は目先の利益にとらわれず、フェアーな態度で臨み、正々堂々と自分の力で自由競争下に処してほしいと付け加えている。

１７．**光明に満ちた人生**

高崎の人生観に 「自分の現在の生活が、単現状を維持して行くのみであったならば、それ自体、生活も自己自身も退歩していることになる」というものがあった。 だから高崎は「毎日の生活・仕事・ 事業に進歩、発展、向上、革新をはかって行くところに人生の光明がある」と考えていた。

１８．**経営者は名医であれ**

高崎経営者に対する警鐘として言った言葉である。

「自分のからだはいくら名医でも自分でみることはできない。そうなると経営者というものは、あまりその会社に利害関係をもっていると、自分のからだを自分でみるようなもので、そこにまちがいが起る結果になる」と続けている。

１９．**守愚（しゅぐ）**

高碕がキューピー株式会社の創業者である、中島董一郎氏に贈った言葉である。

「才のある者は自分の才能に恃み（たの）、その優越感に流され易いが、愚を守る者は身を持するに謙虚であって、常に精進努力を怠らないものだ。」人から何と言われようが、一途に自分の信念を貫き通し、社主としてきちんとした社風を創り事業の達成を期待して中島氏に贈ったものと思われる。

２０．**我々は常にお得意様の忠実なる使用人でなければならない**

高崎の商売上の信念である。

満州から引き揚げてきた後にGHQのメンバーに対する七面鳥の需要を見て、アメリカの友人から種親を送ってもらって事業を成功させた経験から得た哲学である。

高崎は製品の質の向上と、コストの引下に対する努力を続けることに邁進した。クリスマスに七面鳥を食べる習慣を日本に持ち込んだと言える。

２１．**長となる人は、人の長所だけを考えておればよい。**

**短所は後ろへ残しておけばよい。その長所を利用することによって、**

**その人が分かってくるのだから**

高崎の人育ての信条である。

評論家で茨木中学の後輩でもある大宅壮一氏との対談の中で「会社経営の場合において、多少社長の癪に触るような社員がいても、それは必要な持ち駒として認めるというようなことにはならんのですか」という質問に対して、高崎が答えた言葉である。

２２．**この世には四種類の人間がいる**

阪急電鉄創始者の小林一三氏が、日魯漁業の 平塚常次郎氏を評して、高碕に言った言葉である。

「いちばんダメなのは、利口そうに見えるバカ。 これは下の下だ。その次が、バカでバカらしく見える奴だ。その次が利口で利口ぶってる奴だ。そして一番偉い奴は、利口でバカを装っている奴だ。」

２３．**鳥類はバカだが、爬虫類は利口だ**

動物好きで有名な高崎が口癖のように言っていた人間を揶揄する言葉である。

「爬虫類は色気と食い気しかない。いろんな動物を飼ったが、人間よりはええな。食い物を充分にやって、春先の色気づいた頃だけ注意しとれば、決して人間をかじらん。大概の人間は食い物だけじゃ承知せんで、着物や勲章を欲しがる」と続けている。

２４．**野生の鵜となれ**

高崎は動物園をやっている時に鵜を増やそうとしたことがあった。野生の鵜は、自分が食べるかどうかは別にして魚を見ると本能的に獲ってしまい、これを吐き出させると、また魚を獲りに行くことに気付いた。これと同じで経営者は、どんなに働いても税金をとられてしまうが、働くことそのものが楽しみであるべきと考えた。

２５．**西欧と東の国との間に何かのつながりをつけて、日本の立場をつくっていくことが、日本の政治家のやるべき、また実業家のやるべき仕事ではないだろうか**

政治家としての高崎の信条である。

昭和二十九年十二月、高碕は鳩山一郎内閣の経済審議庁長官に就任した。翌年にはインドネシア・バンドンで開かれたアジア・アフリカ会議に、当時は「そんなところに行かんほうがいいだろう」という意見があったが、高崎が日本政府代表として出席することになった。

２６．**虚心**

高崎は自身が興した短期大学(東洋罐詰専修学校・現東洋食品工業短期大学)の学生たちに「子供の様にシンプルな考え方をせよ」と繰り返し語りかけていた。

大人には様々な欲があり、 恥や損することを嫌う。 だから損得計算がつきものになり、迷いも起こるのだ。子供の様に虚心になって迷いを断ち切ることが大切で、虚心ができればそれが強さと正しさに通ずる。

２７．**食品は人の命に関わるものであり、食品の仕事に従事する者は心の正しい人でなければならない**

日本の粗悪な輸出罐詰事件の教訓から導き出された高碕らしい言葉である。

中身の見えない保存食品である罐詰を造る者は、常に消費者が安心して食べられるものを提供しなければならない。そのため、粗悪品にならない確かな技術と、商業ベースに流されない、正しい心を兼ね備えた罐詰のスペシャリストを育成することだった。

２８．**古きものは古きが故に尊い**

昭和三十四年、御母衣ダム建設予定地の住民の案内により荘川村を見て回った時のこと、高崎は老いた巨大な桜の樹を目の当たりにした。

後年「この桜を救いたいという気持ちが、 胸の奥のほうから湧き上がってくるのを、 私は抑えきれなかった」と語っているが、 この思いが荘川桜の移植プロジェクトにつながっていった。

２９．**日本自身が最も平和を愛する国民として信頼されねばならない**

高崎にとってアメリカは、青年時代から度々訪れている第二の故郷ともいえる国である。

昭和三十六年、第三十五代大統領に就任したケネディの就任式典に招かれて 若き中曽根康弘を同伴して出席した際、戦後の日本が国際舞台において、アメリカとの協力を基調としながら歩んできたことを振り返り、高崎はこう誓ったのである。

３０．**日本の水産を支える底辺の人たちの幸福なくして、何の水産日本なものか**

昭和三十四年、大日本水産会会長の高崎は根室の漁民たちから「北方領土問題により歯舞群島にある貝殻島の昆布を取ることができない」という窮状を耳にし、フルシチョフ首相やミコヤン副首相に昆布漁許可の直談判を試みた。

それから四年後の昭和三十八年、日ソ貝殻島昆布採取協定が結ばれ高崎の念願が達せられた。

３１．**樺太を返せとは言わないが日本古来の領土である沖縄千島をうばわれることは承服できない**

高崎の領土問題に対する考え方である。

そもそも「戦争によって他国の領土を獲得することは罪悪である」という理念に立ち、「日本は米国と戦争をしたけれども、ソ連と戦ったと思っているものはいないはずだ。

その証拠には、日本人は一人のソ連人も殺していない」と当時のフルシチョフ首相に主張していた。